

のりの一声で踏ん切り着いた、二人はのりを交えて世間話を始めた。

近隣で連続放火事件が解決せんと見え、いづくは各署総務課らしき女性で五割がたと言った所、七時半頃、年恰好からリタイヤ組と思しき三人組が入って来た、風体からしてその筋の者らしきとも一平等は、平穩を装いながらもそれと無く監視した。

八時十五分、のりのワンマンシヨウは始まった、

お富さん、東京だよおつかさん、有楽町で会いましょうと三曲続けた、あのそれらしき三人組は顔を綻ばせ拍手を送っている……。

ひばり曲、お祭りマンボ、真っ赤な太陽。今も昔も歌は人々を楽しませ喜びを与え続けてくれます、でも今宵も後二曲となってしまうましたとのりは言い機器の裏手へ消えた。

三十秒後お待たせしましたと現れた、皆はアツとするも拍手が興った。

ピンクの法被に短パン、背には丸に上の字、衿字にはちーむいづくに松下紀子と入っている、

「これいいでしょう、ここにいるマキちゃんのお爺様が作って下さいました、今宵は着おろしです。では早速参りましょう村上水軍の庭とも言うべきか瀬戸内から瀬戸の花嫁」

イントロが流れ始めとのりはモデルウォーク右に左に歩き衣装を皆に披露し始める、ワンコーラスが終わると毎度ながら握手、握手だ。

例の三人組に近づくと彼等から握手を求めて来た、一言二言話も交わしていた。のりのキャラが独特の動きでリズムを取り歌っている、最終ナンバーは好きになった人だ、はるみ節いやのりこ節が炸裂、こうなったらのりペースだ一緒に口遊む人や頭上で手拍子等々、拍手に追われ裏手に消えた。

照明が明るくなるとのりが私服で出て来三人組の所へ、良かったよ上手いなーとでも交わしてるのか談笑し始める、のりの案内で三人は一平のもとに。

「一平さんこちらは元高輪署の刑事さん達です、大泉警部補さんからいつぶくを聞いたそうです、ほっほー楽しそうなコーヒーショップだな、いつか行ってみるかで今宵となったそうです」

二宮です、久保田、大前田ですとそれぞれ名乗り握手を求めた。

谷端一平です、こつちはと言い始めるとマキが言い出した

「村上真姫です、普段は幼稚園で保育士していますが何をするのも何処へ行くのも一平と一緒にです」

「北野流の使い手さんと大さんは言っていた、そしてえらく腕っぷしのたつお嬢さんだと」

「あんまり褒めんと使わさい、その気になってしまおう」

だつて本当の事だもん訂正のしようがないじゃない、マキはふくれつ面で一平に言った。

「北野流の使い手さんと言い、プロ顔負けのエンターテイメンター紀子さん、厨房にいる奥さんもだ、元デカ長さんの周りには美人さんが多い羨ましい限りだ」

一平はまりとマキ、のりを見渡した、何故か三人は神妙な表情。

「わし等は聞き込み何ぞよっぽど腰据えてかからんと風体を見、逃げ出されてしまう事もしばし、戸越しに高輪署の刑事です、話を聞きに来たと言ってもドアをピツシャと絞められてしまう、風体の悪さは高輪署の伝統だ、わしも同じような場は度々だと大さんは零し笑っていた」、

「でも今は松宮刑事さんもあるし変わって来たんでは」

「あれっ、お嬢さん松宮を知っているんですか」

「はい、良く存じ上げています」

その後も雑談は続く、十時近くにお邪魔し遅くまで話し込んでしまったこの辺でお暇しますと立ち上った、来週のステージを楽しみしていると言い、その筋と思しき風体の元刑事さん達はのりにハイタッチし外に。

「小生の時間はとうに過ぎていく、このカードでのりを食事に連れてつてくれ、でもあのミニ走るかな、走らなければ走

「らせばいいだけだ」

「一平それってどういう事走らなくなっても走らせろとは、でもさつき快調だった」

「そーか頼んだぞ、小生はもー寝る」

「おやすみなさいとのりとマキに、一平は厨房のまりにハイタッチ。」

「国王来日にまで後十日となったがこれといった収穫はない。」

朝六時半、一平は北野流道場門前で早馬<sup>二</sup>を停めた、何時もはマキが門前で待っているのにどーした事かマキがない、山ガール仕様のマキが飛び出してきた。

「父っ様が出がけに大分涼しくなってきた秋物を大目に揃えてくれと言いついたんだ、あれやこれやと揃えておつたら五分遅れつちやつたゴメン」

「村上課長さんはマキを頼りにしてんから言うんであつてそーじゃーなけりや頼まんよ」

「昨夜のうちに言つたいてと言つた無理だ今朝帰宅したんだ」

「無理を聞いてくれた村上課長さんは喜んだ事だろう」

「娘に礼を言うのが苦手か否恥ずかしいのだろう、聞こえんような声で有難うだつて」

「そーだろう朝からいい事やつたね、今日は今まで以上にー写真撮れるともよ」

と一平は言いアクセルを回す、三鷹通りから甲州街道を走り中央道に入った、早めに出たが土曜日のせいか車は多め。

「おいマキ、メット新調したのかサイケデリックな塗装が映えるな」

「松ちゃんにもう直ぐ誕生日が来ると言つたの、そうしたら何かプレゼントでもと」

「即座にフルフェイスがいいと言つたの」

「僕には良く分からん、領収書を持ってくればいいと」

「てな訳でこのフルフェイスを手に入れたんだ、一平からは見えんだろうが右側にカワセミのワッペンが貼ってあります、野萱さんから頂いたもんです」

「高かったんだろう、お返しを考え大事にせんとな」

「あつたりきよ、松ちゃんからの誕生プレゼントだもん」

圏央道をあきる野で降り武蔵五日市駅前を通り檜原街道に、途中より適度なカーブが続く、マキは慣れたものその度に右に左に体重移動、後続車BMWがつかず離れずについて来た、奥多摩周遊道路に名称が変わる、檜原都民の森駐車場に入った、BMWは小生等の隣に止まった。

「決まってるねこのサイドカー、適格に体重移動してのコーナーリングも最高です」

とまだフルフェイスとっていない小生等に話しかける。

やおらメットを脱いだ小生等に、爺と孫カップルは想定外だったかおやつとした表情のBMW運転者さん。

「小生等は鳥観察グループに所属しています、今日ここでその観察会があります参加しにやってきました」

「私等は三頭山へ登る予定です、それにしてもサイドカー乗りこなすお爺様と、走りをおろする如く体重移動するお孫さん、羨ましい限りです、この上にある学習センターによってから頂上目指します、鳥との良き出会いを」

と言い一足先に行きますと遊歩道を登り始めた。

自分等はジジと孫にしか見えんのかなとマキは不服そう、あそこの売店前が集合場所だ機材用意してとマキを促した。

既に数人観察会メンバーさんが来ていた会釈を交わす、集合時間まで三十分ある、辺りをひと回り、シジュウカラやその群れに混じってコゲラが見え隠れする、エナガもジュリジュリとグループで枝から枝へ忙しなく移動している。見慣れた濃紺のワンボックスカーが駐車場に、本日の野鳥観察会の首謀者叶山さんご夫妻の登場だ。やあーとばかり右手を

挙げた、遅れる事五分路線バスが着く。バスに前後し車が二台、集合時間少し前にして参加者全員が揃った、今日の観察会参加者は十七名との事、叶山さんが朝の挨拶を始めた。

「暑からず寒からず天気も崩れる事無い、出は何とも言い難いが良い観察日和になるでしょう、ここから森林館までは上りになっているが後は整備された遊歩道が三頭の滝まで続きます、それより上はケースバイケースさせて頂きます」  
それでは観察を始めましょうと先陣を切った。

木屑を敷き詰めたこの道は森林セラピーロードとも言われています、とか何とか言いながら叶山さんはスコープをセットした。

「カラマツの天辺に間もなく南に帰るであろうオオルリがいます、スコープに入っています交代で覗いて見て下さい」

うわー青くきれいな鳥さんだ事と年齢不明なお嬢さん方は口々に。シジュウカラの群れにヤマガラが入っている、右やや奥なれどジャージャーとカケスが騒ぐ、マキは機材を右に左に奮闘するが野鳥に半ば振り回された格好だ。皆がスコープ見終わった所で次に行きましょうと。

「変わってもいいんだよ」

と一平は機材担ぐマキに言う。

「自分を誰だと思ってるんだ何のこれ頻り、一平はTG4で花や昆虫でも撮っていたら」

「そーすつか」

とサイドポッケより取り出し数ミリの昆虫に向けた。

叶山先生の歩が、はてなと止まり双眼鏡を覗いた、間違いないオオルリの若鳥だと言いつつスコープをセット、腰と上尾筒、尾羽に青色味はあるが成長の比ではない。

「オオルリの若鳥です、成長との違いが判りますスコープを見て下さい」  
マキも数カット撮ったよーだ。

頭上でエナガが5、6羽ジュリジュリと枝渡りしている、マキがあられもない格好でシャッターを押しまくる、見兼ねた叶山先生がまっつぐな姿勢で撮ろうとするからその様な無理で女性らしかぬ格好になってしまうんだ、体を横に曲げフアインダー見れば自然な姿勢が取れると。

「先生、ほんと無理なくフアインダー覗けるよ、エナガも撮れました」

そんな光景を手持ちブタさで眺めていた小生に学者Oさん。

「ヨコズナサシガメです、これでも撮っていて下さい」

と平たく黒白の昆虫を持って来た。

すかさずTG4を取り出し深度合成モードで。

観察会一行はそーこーしながら歩を進め大滝休憩小屋に到着、小屋の手前を左に曲がり進むとつり橋がある、三頭大滝が見渡せる滝見橋だ。

「昼には早いなー、でもここいらで小休止して行こうか、参加の皆様マイナスイオン浴びて来て下さい」

叶山先生は言う。

小生とマキも皆に続く、つり橋中程から三頭大滝の全景が見渡せる。

「一平撮ってよ、滝バックにして」

「狭い橋の上では無理だよ」

見兼ねたか観察者Hさんが橋上からは無理だが袂を少し入った所からなら人物と滝のコラボ可能ですと、マキに引きずられ袂で一枚、序でHさんにTG4を渡しマキとのコラボショット、有難うございましたとマキは深々と礼を言う。

「さっきから浮かぬ顔してどうしたの」

マキは気付いていたのだが言い出せずにいた、満を期して一平に聞いた。

「見るならそれと無く気付かれん様に見えるんだ、大滝休憩小屋の脇のベンチで休憩しているのか飲み物を口にしてい

る女性、いや男かも知れんがハンチング帽を被った人、双眼鏡で野鳥観察する仕草や植物観察しているような、近づく離れずでこの野鳥観察パーティを監視しているよう見える」

「いつ頃からそれは」

「駐車場からだ、衣服下は筋肉で溢れているんだろう男のような見栄えがする、だがタミーを入れた女性ではと、サングラスしマスクして顔は確認出来んが女性の様でもある。ひよつとしたら反国王派の回し者で小生等に何らかの危害を加えようとしているのでは」

「で、一平はどうしようとしているの」

「このまま何もなかったように観察会を続けようと思っている、これだけ散策者が多い所で行動を起こせば本人のリスクは高い、ましてやぶつ放すよーな事はしないだろうと小生は想っている、例えぶつ放し仕留めたとしても散策者等に取られ押さえられるのが関の山、逃げようがない」

「おおーい一平、いつまでそこで写真撮っているんだ、先に行くぞ早くついてこい」

参加者さんが達が言う。

「わおー、ゴメンすぐ行く」

その先は緩やかな登りとなっていて、岩に阻まれ僅かながらの水量は岩の間を蛇行する。先のメンバーがミソツチョと言う、大きさのわりには大きな囀り、声はすれど姿は見えずだ。

回りに溶け込む色彩の持ち主ミソサザイ、見つからん小生は眼をパチクリさせてしまった、又もや見兼ねた学者Oさん、様々な形状した岩を順を追って説明、よーやくミソツチョに辿り着けた小生とマキ。

ありがとうと礼を言いシャッターを押した、マキの機材から連射音が響く。

「マキちゃん撮れたようだな、プレビューさしてみて」

「尾を張りあげ大口開け、力一杯囀っているミソサザイさんが映っています」

「どれどれ私にも見せて下さい、ほー暗がりだがボケもなく良く撮れているHPにアップに適している画像だ、早速だらえもんサイトにUPしてみてください」

とOさんが仰っていますマキ、一平は無言でこっくり二つ。

時間だお昼にしようとお観察会首謀者叶山さんが言う、皆は先程の大滝休憩小屋付近まで戻り敷物を広げた。マキはタッパー二つと保温容器をザックより取り出す、

チョー特大ライスボールをパクつき始めた、何時もの事ながら皆の視線を集めている。Yさん、Nさん、Kさん等々Vサインを送って来た。

「一平、食べるの上手になったね」

「何十回と食べさせられて来た上手になって当然」

「握り方も試行錯誤してこの大きさこのにぎり具合になったんだ、ボロボロと崩れないでしょ」

「同じところではなくビックバーガー食するが如く少しずつ食べ口をかえると崩れずに食べられる」  
よく気が付いたね、さすが一平だねとマキが。

そんなやり取りしながらの昼飯、いつしか皆の表情も緩んでいた。

「ハンチング帽の人どこに行ったか分かる」

「ミソツチョコを撮りここに戻り始めた時は見え隠れしていたんだが今は視界から消えている」

自分等の想い過ぎだったのかな、それとも諦めたのかなとマキが言う。

「小生は又現れると想っている気を抜かんとな」

Kさんがいつものようにデザートを配り始めた。

「ありがとうございます」

「もしよかったですら例のライスボール、次回の時に用意しますが」

「ありがたい、でも私にはあの大きさでは食べきれない、食べ方も難しそうです見るだけで充分です」  
そんなやり取りをしていたら小屋前広場の先の木にエナガの群れが、ランチタイムを中断し皆は想い想いの方向からレンズを向ける。

少し間があつて三頭大滝方向からジャージャーと複数羽の鳴き声、カケスだと機材担ぎ皆が行く、枝被りだが二羽梢に止まっている、叶山先生が臆病な鳥です、大きな動きをせず脅かさん様狙える場所を探し撮るようとアドバイスがあつた。小生と数人のご婦人は皆の荷物の留守番をした。

ばつちし撮れたんだろう、戻る皆の表情に笑みが。

「僅か枝被りだがツーショット撮れたよ、ほら見て」

とマキは液晶に表示させ一平に見せた、おーgooだ、学者Oさんも迷わずVサイン。

皆が揃ったところで叶山先生は言い始めた。

「今日の出が良かった、想わず私も見入ってしまった、解散時間まで後三十分、名残惜しいですが参加者さんにもご都合があらうかと想います、よつて後十分でここを出て下の駐車場へ観察をしながら行きたいと想います、皆様のご理解をお願いします」

了解の意味で皆から拍手が。

帰り支度をしていた、ルパン三世が早く出るとばかり外してあつたウエストポーチから喚きだした。

「すまんマキ出てくれ」

「あら、大人からだと、もしもしマキです今一平と変わるからねちよつと待ってて」

「一平です、待たせてすみませんでした」

「いやー待たうちに入らんよ、それより今日の鳥果をどうです、マキちゃんの声からして大漁では」

「アメリカの母つてどこかな」

「なんや、そのアメリカの母とはと大さんが言った。」

「おーごめん、大さんに説明していなかったか。アメリカの母とはマーマーで鳥果はまーまーです」

「一平流言い直しには解説がつかんと分らん、と大さんは返し話し始める。ピース大使館駐車場に中型の箱車が入ったと松宮刑事から連絡が入った、大きなアルファベットが入っているその箱車は大手レンタカー会社の車だった、俺も合流した。六時半頃出て来た、情報屋の田川健二郎が運転していた、助手席には大きいマスクをしハンチングを被りサングラスの男でもある様な女性でもあるような人が座っていた」

「その助手席の人の容姿詳細は分らんかな」

「なんせ胸辺りから上しか見えなかった、肩は男の様に見えた、衣服の上からだを着方が不自然に見えた、タミーを入れた女性の可能性も考える。髪の毛はショートかロングかは不明、大き目なハンチング帽を被っているが故、ロングなら丸めその中にも入ってしまうだろう、おまけにスカーフで首の部分が見えなかった」

「それと同じ服装と想われる人がここにも出現、離れず近づかずだった」

「それは穏やかでないね、どこか襲う気配は」

「小生もひよつとしたら想っておつたが、少し離れた所で見え隠れするだけ、時には双眼鏡で野鳥観察してた、昼を境にどこかに消えてしまい今は見当たらん、小生等の思い過したたのか」

「そうも考えられるが俺の想うに特殊隊員の寺島加奈ではないかと、と言うのも助手席に座った容姿ら見てタップは百七十内外、今から想うとマスク等からはみ出た肌の色がやけに黒かった様にも想える」

「何処方面に行ったかは確認取れているかな」

「目黒道りに出て直ぐ左に回った、極秘捜査ゆえ無念ながらパトはない、朝なのでタクシーも来ない」

「そーか残念だなせめて行先でも分かっていたらいい」

「一平さん、俺を誰だと想っているんだ抜かりないよ、お昼少し前レンタカー会社突き止めた。借りるのには免許書

提示が義務付けられていた、記入必要欄に白金の住所と田川健二郎と記され行く先は奥多摩方面、二十四時間で契約され今朝四時頃田川一人で車を引き取ったと言う」

「大人さんがとう、小生の黒目が大きくなつてしまった、寺島加奈似の人、巧妙に出来たダミーが出回っている身体を問わず、マスクやハンチング帽にもダミー入れれば人が変わつてしまふと聞く。助手席にいた人物とここで見かけた人物は同一の可能性大だ、中型の箱車と行く先が奥多摩方面は何の為かは分らん、引き続き時間の許す限り張り込みをお願いしたい。それと深夜早朝にと張り込んでくれた松ちゃんに労を労つて下さい」

「よっしゃー、言つとくよー平さんもこの先何があるか分かんない、気分つけてくれよな」

と言い二人は電話を閉じた。

観察会は森林館に向けセラピーロードを進み始めた。往路と同じシカケス、ヤマガラ、オオルリ、エナガさん等がこれでもかとお出まし下さった。その都度叶山先生もプロミナをセットし参加者に見せている、皆をはつきり見えた綺麗な鳥だねとその都度歓声を上げていた。帰路半分に満たないと言うのに解散時刻を回ってしまった。突如先生が叫んだ頭上だ上を見ると、アオバトが五羽いますと言いつつプロミナをセットす。

「どちらかと言うと黄緑色に見えると想います、脇に赤紫色が入ったのが雄です、全体に雄より淡色なのが雌、群れで行動する森林性の鳥です、真上なので少し離れると良く見えるようになります。塩分が必要で海岸に行き海水を飲むとされています」

先生は少し離れスコープをセット、雌雄が入っています違いが判りますよ、ほんと色合いが濃いのと淡いのと違いが良く分かりますと皆は口々に。

その後ウソやアトリもお出まし下さり森林館前に着いたのは解散時間を大分回っていた、ダメ押しとばかりにエナガとヤマガラのコラボが鳥観察会一行を見送ってくれた。

駐車場に降り多くの野鳥さん達との出会いを土産に解散と相成った。既に帰ってしまったか駐車場には車は数台

停まっているだけ、小生等も機材を終い帰り支度を始めた、九月も下旬、山の日暮れは早い、つるべ落としの如く辺りは薄暗くなる、寒さも昼間とは違い、じゅわーっと伝わって来る、小生とマキは革ジャンを着込み早馬口に乗り込んだ。奥多摩周遊道路を右折し帰路に就く、間もなくして黒っぽい車がヘッドランプつけ迫って来る、来る時と同じようにサイドカーファンがついて来たかと想い二人で適度なコーナーリングを披露、次の瞬間ガアーンとした衝撃が伝わって来た。

早馬口に追突して来た、何しでかすんだと路肩に止まろうとするも執拗に迫りくる、追突し谷底に落とす気なのか突っついて来る。

「マキ！、行くぞクラブバー確り掴み足を踏ん張れ」

一平は極限のコーナーリングを始めた幾分離れる、ミラー見るも運転者は確認できない。

「タイミングをはかり後ろを見てくれ、車種と分かればナンバー見てくれ」

「車内は良く見えんが影の様に運転者一人だけのようにだ、黒っぽいBMWでナンバーは4310と確認できたがそれ以外は」

「良くやったそれだけ分かれば十分だ、このままの間隔を保てれば追突できん、下りきれば車も多くなる」

そこまで行けば一安心と一平は早馬口を右左とタイトに操りながらどこか安堵感が、だがそれは大間違いだった。

撃つて来た、左ミラーを撃ち抜かれた。

「コーナーを攻める以外は極力姿勢を低くしろ」

「一平、そうは言うものバランスを取るのに懸命や、低くしろと言われても」

二発続けざまに打って来た、マキのメットにヒット。

「ほら言わんこっちゃない、可能な限り体制を低くしろ」

「一平、無茶言うなよバランスとらなければコーナーで横転も」

「銃弾撃ち込みに徹し追突はせんと見た、気付かれんよう速度落としバランスは小生一人でとる、姿勢を低くしてろ、マキ分かったな」

右のミラーがやられ一平のフルフェイスにヒット二つ、更にマキのメットにも。

「マキ！、大丈夫か返事しろ」

「何のこれしきの弾丸、自分には通用しないよ」

「無事だなマキよく聞け、このままだと鉛の弾、食わせられるも時間の問題だ、大博打打って出る」

「大博打って出るってルーレットやバカラ、ここいら辺にあるの？」

「アホンダラ、そらーあらんだろう、いいか二回は言わんよく聞け、三つ目の先のコーナーは砂利の駐車場になってい  
る想いつきり突っ込む、入ったらフルターンする、クラブバー掴み足を突っ張り側車の外に身体出すんだ、体重でフルタ  
ーン時のバランスをとるんだ、さもないと早馬は転倒してしまう」

「出せてどの位出せばいいんだ」

「膝辺り否膝は無理だな太腿辺りから上だ」

「そんなにしたら自分のバランスが崩れ兼ねない」

「それをうまく支えるんだ、おっといけない次のコーナーの先だ合図したら言われた通りに」

BMWは体制を整えたか迫って来た、一平は駐車場目掛け突っ込んだ。

「マキ今だ、クラブバー確り掴み足を踏ん張り突っ張るんだ」

一平の声にマキは側車から身を出した、早馬は砂塵を巻き上げスピンしながら右ターン、咄嗟のターンにBMWは  
曲がり切れず急ブレーキをかけるもスリップしそのまま側溝に前輪を落とした。

その間に一平は体制を整え麓方向に走り始めマキとハイタッチ、上川乗のT字路過ぎた、車も多くなり襲われる事  
もないだろう。

「村上課長に状況を報告しナンバー照合を頼んでくれ」

マキは経験なきバトルと銃撃で幾分我を忘れていた様子だ、はいと返事はすれど普段と違う、間をおいて気を取り直したか、父っ様マキですとコールした。

電話の内容から村上課長の緊張めいた顔が浮かぶ、父っ様、頼んだよと電話を切った。

深大寺の駐車場に早馬は入った、排気音を聞いてまりが飛び出してきた。

「二人とも大丈夫怪我はしていない、村上捜査課長さんから電話が入ったよ」

「小生等は大丈夫やが早馬とメットをやられた」

まりはほっとしたような表情をしコーヒー入れるからといづくに、閉店後だ誰もいない。

尚も不安気なまりに二人は奥多摩摩周遊道路での出来事を説明す、怪我がないのを聞いたまりも落ち着いたか三人でコーヒーを飲み始める。

「両方のミラーとリヤフェンダーに側車荷物室がやられた、直すのにいくらかかるかな」

と一平が言うと怪我が無かっただけでも良しとしなければ、早馬は修理に出せば治るが……とまり。

「松ちゃんの誕生祝いのメットに弾痕を四つも付けられちゃった、一平のメットにも三つあるよ」

「それって身体に打ち込まずメットとミラーを狙ったんじゃないの」

まりが言い始めた、メット痕を悔しがるマキを見ながら一平が言う。

「まり、いいところを突いたな、真面に打っていたら今頃は二人とも」

「今頃は二人ともって何」

とマキがまりに聞いた。

「マキちゃんそれはね、狙撃者の想いは分からないがわざと身体を打たずにミラーとメットを狙ったのよ」  
暗がりでも然も片手運転で引き金を引く、沈黙を破って一平が話し出した。

「銃弾は九発発射されたのは事実、装填も一回はやっているだろう然も片手運転しながらだ、銃撃の名手であり運転技術も確かなの者の犯行だ」

て言うとな誰なのよその狙撃者はとマキ。

「一平、それで行方不明の特殊隊の隊員では」

「まり、小生もそー想っていたところだ」

それって寺島加奈隊員の事とマキが聞いた。

一平が言った、マキも気づいたよーだな、殺ろうと思えば殺れた筈、が彼女は何らかの想いで出来なかった。

「聞くところに寄れば容姿は男性の様だと聞いている、だが最近のダミーは良く出来ている中身が女性でも分かんない、きつと一平が言うように寺島加奈であり何らかの理由で殺れなかったのでは」

まりが言い終わるとすまん、遅くなってしまったと村上捜査課長が入って来た、まりが厨房に立った。

「一平さん、黒っぽいセダンで4310ナンバーの車は五台あった、うち四台は持ち主が確りしていた残る一台は盗難車で昨日届が出されていた、お役に立てなくて申し訳ない」

「いや、ありがとうございます今コーヒーが入るから待って下さい」

「まりさんのコーヒー久し振りだな」

「父っ様、無理してそんないい方しなくても、週に二回は来ているといつだか総務課の女性が言ってたよ」

「おおそーだった、一昨日来たばかり」

そんな親娘の微笑ましい会話に一平とまりは顔を見合わせ隠し笑い。

「一平さん、聞いてしまった以上このままには置けないんだ被害届を出して下さい」

はい、畏まりましたと記入し始める、マキは自分のメットの痕もしっかりと書いといてって。日時、経緯等記入しこれでいいかなと村上捜査課長に渡した。

リリーンと昔ながらの呼び出し音、村上ですと電話に出た、そうかありがとうと電話を切った。

「マキから電話があり直ぐナンバー照合した、それと共に五日市署と奥多摩署に連絡をし防犯カメラをあたってもらったんだ、無念ながらヒットせず」

「てー事はセダンの黒い4310はあそこに置きっぱなし」

「それが可笑しいんだ無いんだよ、消えてしまったんだ、平成の世、車が消えるなんて」

村上捜査課長が窓越しの街灯を眼にしながら言う。

「何か変だな、でも」

と言いながら一平の黒目は大きくなってきた。

マキも消えた車はと十津川警部の助手にでもなったつもりで宙を見つめ考え込んだ、お待ちどうさまでしたと湯気が出ているコーヒーを村上捜査課長の前に置いた、一同我に返る。

あくる日浮かぬ顔していつぶくで一平はキーボードを叩いていた、まりは開店前の準備に忙しく動いている。

「消えた車の事を考えているんですよ、私は現役の頃違反者と接する時は車は兎も角住所氏名を真っ先に確認していました、盗難車の持ち主の名前、住所は確認したの」

「していない、盗難車としてでそこまでは、早速村上捜査課長に聞いてみよう」

一平は盗難車の持ち主の名前と住所を聞いて、あつうーと発し固まった、まりが近づきどうしたのと声かける、まりの声に正気に戻ったか一平が言し始めた。

何故に絶句と共に固まってしまったかとまりに言った。

「突然に体調悪くなったかと想いました」

「驚かせてごめん、盗難車の持ち主は寺島加奈だ、しかもモスグリーンのBMW」

「ぼっちしじゃないの狙撃手は寺島加奈ね」

「だけんどBMWは消えてしまったどこに行ったんだ」

「すこし前いや大分前だったか、ナンセンストリオのギャグで（親亀の背中に小亀を乗せてー）とかが流行っていたよね、乗用車なら積載車に楽に積めるんでは」

「昨日はその時間、カメラに写っているのは乗用車やバイク、小型のトラック、路線バス等で積載車は走っていない、あつ待てよ奥多摩湖方面で箱者走っていたとある」

「一平、それだ持ち主は誰だ運転者も確認できるのでは」

「まり、ありがとう奥多摩署だ、よし手配してみよー」

「いい返事が返ってくると良いね、十時だお茶にしよう待ってて」

待つ間一平にしては珍しくイライラ感が、調べに一時間や二時間はかかるでしょう、とまりは言いレアチーズとコーヒーを二つづつ用意しテーブルを挟んで座った。

落ち着き払うまりと対照的な一平、窓から見える色濃くなってきた木々を眺めていたがポーンと膝を叩きスマホをとった。

「一平です、大さん頼みたい事があるんだいいかな」

「今まで断った事があるかや、用件は何だ」

「おーそーだったなごめん、で早速だが田川が借りた箱車、いつ頃返しに来たかその時の状況も合わせてお願いした、特殊隊寺島加奈も一緒ではなかったか等々」

「お安いご用で、吉報待っててくれ」

「よし大さんをお願いした。ところでまりと向き直った、盗難届は何の為だろう単に捜査を遅らせる為だろうか」

「ナンバーを通報されても所有者をはぐらせる為じゃーないの、敢えて関係者の車を使えば足が直ぐついでしまう、盗難車にすれば所有者は対象外で処理されるのを見越しあえて盗難届を出し使ったのでは」

それ合ってるかもと言いつくをへの字にし一点を見つめ始めた。

この時間、何時もの様に参拝者等でいっぶくは半分程うまる、お昼ですよとまりはジャンボトーストとパスタをテーブルに置いた、ありがとうと一言、後は難しい顔して食べ始める。

程なくしてルパン三世が呼びよつた、一平さん吉報だぜと大さんが電話を掛けてきた。

「その声だと想定外の情報が手に入ったよーだな」

「丸印だよ、箱車をレンタカー店に返却したのは田川一人で翌日の午前二時を回った頃だ、とまー借りれば返すのが一般論だよな」

世に借りつばなしはいないと想うと一平は合の手を入れる。

「と、ここ迄は誰も想定内だいな、でもよ一平さん、その箱車は返す前の十二時頃一旦ピース王国駐車場に入ったんだ、例のBMWを降しに寄つたと俺は想定したんだが」

「大さん正解だな、十二時頃駐車場に入った時助手席に寺島加奈は同乗していなかったか」

「松宮の報告だと乗っていなかったと聞いている」

「箱車に積んであると想われるBMWに乗り降りしたのでは」

「俺もそうだろうと察しているんだ、それともう一つ報告事項がある」

「それは田川のレンタカー店でのやり取りではなからうか」

「一平さんにあつちやー敵わんなその通りだ、箱車でとレンタカー店は受注していた、この車に乗用車を積みたいて聞てきた、自走できればラダーレールを使えば可能です、だけど普通仕様の箱車では床が引つかかつてしまいます」

「では車を積むことは出来ないな」

「お客様ご安心ください、低床式箱車があります、それなら積めます」

「じゃー、その低床式箱車を頼むと田川が言った。」

「畏まりました、ご利用日の前日までにご用意しておきます」

大まかな料金を払い、引き取り時間は追って連絡入れると言って出て行った、有難うございますお待ちしていますと店員は言った。

「とまーそんなやり取りがあつた」

「大さん、ありがとう、BMWは都民の森辺りで箱車から降りし小生等とバトルした後に箱車に載せ戻つたに相違ない、今防犯カメラを確認してもらっている、間もなく結果が出ると思う」

一平さんくれぐれも無理せん様にな、何度も言うようだが事を起こす時には必ず俺に連絡してくれと言い電話を切つた。

お昼だ、いつぶくも常連さんでいっぱいになった、一平は厨房脇の料理本を置くまりのディスクにPCを置き無言でキーボードを叩いている、そんな一平をまりは構っちゃーられない軽食作りに忙しく動く。

いつしかキーボード叩く手が止まっているのにまりは気付きた、疲れがたまつたのか椅子に座つたまま白川夜船、そつと綿入り半纏を掛けてやる。

ランチタイムが終わりお客さんはいなくなり洗い物を始める、洗う音に誘われてか一平は目を覚ます、半纏を所定の場所に戻しまりにありがとう、まりはにつこりを返した。

「いい夢でも見ていたの良く分かんない人の名を言っていたみたい」

「ウツーつと言い誰の名だつたと」

「私の知らない女性がいるんですか」

「うーもううー、いないよまりの知らない女性なんて」

「一平、黙こそ聞こえなかつたが腰かけたまま微かにスースーが聞こえただけ」

「もーまり、いい加減にせんかい！」

「いつぶくに、もーと口遊ぶ牛は居りません」

「もーいい加減にせんかい」

「又牛が嘶いた」

そんな夫婦の会話にルパン三世が割り込んで来た、村上捜査課長だ。

「ヒットしたよ奥多摩町のカメラがとらえた、田川が運転する箱車に助手席には寺島加奈と思われる人物が同乗している、一平さんの想う通りになった」

「ありがとうございます、カメラ確認に従事してくれた方々に礼を言つといて下さい」

「私からも言わせて頂く、くれぐれも無謀な行動はせんように、お願いしたよ」

了解と言ってガラケイをオフした。

翌日朝食をとっていると松ちゃんから電話が。

「今、大泉警部補に電話を入れました、直ぐに一平さんに知らせろと言われ電話しました」

「分かった用件は何だ」

「早朝、白家補佐官運転するX6が大使館駐車場より出てきた、後部座席はスモーク貼っていて見えなかったが運よくタクシーが来て後をつけました、何処へ行ったと御思いになります、なんと成田空港なんです」

「穏やかでないね」

「そう穏やか無いんです、白家補佐官は駐車場にX6停めた、後部座席からは寺島加奈が降りてきたんです、一平さん穏やかでないでしょう」

「飛行機に乗ったのか行く先は」

松ちゃんは息を整えしゃべり出した。

「アマタ・カブタ国際空港行きに登場した、そこはマーシャル諸島の首都マジロだ。ピース王国はそこから船で三十分

の所にある、寺島加奈はピース王国に行ったと想われます」

「何の為だろうか」

「僕も考えてはいるんだが今一です」

「松ちゃん、小生が思うに奥多摩での発砲事件、車は彼女所有だ、警察が重要参考人として彼女を探し始めたら、確かな事は言えないが寺島加奈を仲間同然にしている者達、彼等にとっちゃ厄介だ、ここは一先ず海外へ逃亡させたいのではなからうか」

今まで二人殺っている、定かな事は分らんが寺島加奈を殺ってしまう事は考えられないでしょうかと松ちゃんは言う。

「それも小生のHDに入っているが今回は無視していいだろう、彼女を軟禁している者達は彼女の射撃の腕を買っている、直ぐには殺る事はない。国王来日に合わせ帰国させる筈だ、又ピース王国で反国王派のラリフ中島と接触し今後を話し会うかも知れん」

「そうですか分かりました、ところで一平さん、空港署に協力を求め乗客名簿を閲覧させてもらった、ところが寺島加奈が登場していない、偽名を使いパスポートも偽造と想われる」

「大使館の事、作るにはわけないと想う、それよりも寺島加奈が成りすました名は分かったのかな」

「はい、住所と職業を注視して搭乗者名簿を見直した、大使館職員で住所は大使館の最上階が目にとまった、名は小西冴子となっていた歳は二十五と記されているがこれですよね」

「松ちゃんありがとう、それと今後も宜しくと一平は伝えてた。」

国王来日まで後一週間となった、一平の表情は益々深刻さを増してきた、反国王派が来日中に何をどーするのか具体的な策が見いだせないでいる。

そんな日海老原幸子から電話が入った。

「一平さん八丈島よ、一等書記官と白家補佐官、それに相谷監察官がここん所良く合っている、それも大使館の

衝立だけの応接室で、時折話し声が聞こえてきます」

「どんな話していたか聞き取れたかな」

「途切れはしているがそれは八丈島とか射撃とか女とか、いつ呼び寄せいつ送り出せばいいのか、間際でなく国王が来てからでは羽田も八丈空港も警戒が厳しくなり送り込みに苦勞すると想う、余裕をもって送った方が良いとか」

「送るとは射撃の名手の寺島加奈だな」

一平はさつちゃんに同意を求めた。

「私には詳しくは分かんないがその人の事だと思う、白家補佐官があの子奥多摩では失敗した、しくじらんよう親を預かる事にしよう、両親を拉致したならば女に伝えておくようにと相谷監察官に言った」

「さつちゃんそんなに盗み聞きして怪しまれんの」

「大丈夫皆で机並べ仕事しています、そこに興奮気味に話してんのが否応なしに聞こえてくるの、聞いているのは私ひとりじゃないの」

「そーかそれならいいんだがおっかないとみたら手を出さんよーに」

「ありがたい、気負つけるわ又電話する」

決行場所は八丈島とキーボードを叩いた。

翌朝、一本杉溪流センターの管理人、定岡さんから電話が入った。

「一平です、定岡さんご無沙汰しています」

「こちらこそご無沙汰です、元氣しています」

一平は定岡さんにしてるとも、声からして分かるだろと言った。

「元氣印のようで一安心、ところで一平さんの耳に入れておきたい事が合つて電話した。昨日加奈ちゃんの両親が娘が東京で待っている、今から会いに行つて来ると言いここに立ち寄つたんだ」

「それで定岡さんはどうなさいました」

「それは良—ございましたね、加奈ちゃんも喜ぶ顔がみえると言ったら二人とも薄っすら涙が」

「予定は何日位と言っていましたか」

「一週間と言っていた、だけど向かいに来た人がどうも」

「どうもとは如何した人物でしたか」

「風体から見てその筋の人物のような、車はジャガーX6だ、一平さんならどう見る」

「明らかに変と想える、それ以上の事は今の所で東京の何処だと言っていた」

「聞く間なくその男に言われるがまま車の乗り込み行ってしまった、一週間経って戻らなければ今市署に連絡しよう  
と想っている」

「それが言い、そうしてくれ今の所は動きようがない」

「一平さん朝から変な電話入れてすまなかった、溪流魚を送るから勘弁な」

「ありがとうございます、寺島さんご夫婦はそれとなく気にかけておきます」

今度は間違いなく殺らねばならない、寺島夫婦を人質にし次は失敗は許さん、確実に仕留めると寺島加奈に迫った、さもないと親の命は保証しない、と一平はPCに打ち込んだ。

「もう行かないと遅れるよ、学友との古希会でしよう、そんなに難しい顔ばかりしていると疲れが溜まってしまいます、  
一切合切忘れ騒いで来たら」

「お—そうするか、帰りは分かんないな、じゃ—行って来る」

「そうそれでこそいつもの一平だ、いつてらっしゃい」

午後九時、いっぷくは閉店した。洗い物と合わせ明日の仕込みを始めた、程なく入口の格子戸が開く音、まりは

流しに向かいながら申し訳ございません今宵は閉店しました、と言い終わらない内にカウンター越しに男二人があまりに掴みかかった、厨房に入って来た一人があまりの顔面目掛けてスプレーを撒いた。

武道には自信のあるまりだが狭い厨房内、おまけに着物だ、眼だし帽を被った三人の男に不意を突かれ、なすすべがなかった、ガムテープと梱包用紐でグルグル巻きにされた。

催涙スプレーで意識薄れゆくまりなれど聞こえてくる。

「PCを探せ、年増だけどいい身体しているぜ、ちよいと遊んでいこう」

とか微かながら聞き取れたが大將格が撒する。

「てめえ等何言ってやがるんだ、PCを早く探せ！、探したら表ドアに鍵かけ裏口から速やかに立ち去るんだ」

午後十一時を回った、府中署交通課の稲垣巡査長が家路へ向かっていた、何時もの様にいづくの前を通った、とつとくに閉店しているのに営業中であるかのように灯がついていた。車を止め窓越しに店の内を見たが誰もいない、中を伺う、不審者らしき格好して背伸びしたり窓を変え内を、厨房脇に草履が無造作に転がっている、更に窓枠に足を掛けた、裾がまくれ上がった二の足がみえる。

稲垣巡査長は窓という窓を叩き格子戸を足でつけたが、二の脚は動かない。

一平は二次会で高校三年生を唄いやんやの喝采を浴びている、脱いだ上着からルパン三世のテーマが、Kが上着を上げ電話の合図、曲の合間スマホとも切れている、ガキさんから一平はリダイヤルした。

「ガキだ、一平さんいづくが大変だ、明かりが付きっぱなし奥でまりさんらしき二の足が見えるも気を失っているのか窓を叩くも微動作せず、入り口には鍵が掛かっている更に叩いてはいるんだが」

「ガキさんありがとう、状況は分かった所轄に通報するとともに村上真姫に連絡してくれ」

「マキちゃんにだな了解」

「今の時間だとタクシーで十分とはかからんだろう、それから裏口が空いているかもしれん、そこから内に、空いていな

ければドアをぶち壊しても構わん、内に入りまりを頼む」

「よっしゃー任せといて」

一平はクラスメートに状況を説明し退席。

裏口には鍵は掛かっていなかった、中は催涙ガスが立ち込めて居る、グルグル巻きにされあられもないまりを抱き起した、心肺に異常なしガスにやられているだけだ。

着物の裾と胸元が乱れている、ガムテープと梱包用紐を肌につけながら解き始める、時同じして調布署とマキが飛び込んで来た。

「マキちゃん、俺は署員に事情を説明する、まだまりさんは覚めてはいない、起きてこれじゃーまりさんが可哀そうだ上手く解いてやってくれ」

「了解、だけど誰がまりさんを」

着物部分は解けた、後は頭のテープだ、うっうーと声がまりが気付いた眼も微かに開いた。

「まりさん自分だよ、分かる今テープ外すからね」

「あーマキちゃんここは」

まりは着物の乱れを気にしつつよつんばに踏ん張りながら椅子に掛けた。

「いっぶくだよ、一平さんも直ぐ来るからね」

「そうか三人組に襲われたんだ、まだ頭がふらつくが思いだしてきた」

「痛かったでしょごめんなさい、でもテープ全部外れた」

「ありがたい、私も正常になりつつ、マキちゃんにガキさん、調布署員さん皆分かる」

「あまり動いちゃダメだよ座っててね、自分流にコーヒー入れるから」

「マキちゃん流コーヒーって初めてだよ、どんな味すっかな」

「でた、まりさんの一平流が、本調子になって来たね」

谷端さん、お話を聞きしてもいいでしょうかと署員が言う。

「ハイどうぞ」

と座ったままだが署員に向き直った、洗い物をしてたらいきなりにと順をおって話した。

「怪我はないようですがどこか痛むところは」

「幾分ボーっとするようだが痛むところはありません」

「とられたものはどうですか」

「PCが無いようですがそれ以外は」

「現金はどうですかレジが壊されている様だが」

「まだ調べていない、今日の売り上げが入っている筈」

「バラ銭が数個入っていますが札が見当たりません」

「売り上げを持って行ったようですね、だけどコーヒー屋の売り上げは飲みに来てくれる人には失礼ですがたかが知れています、二万位と想います」

一平が格子戸を押し開けまりのもとに、すっと立ちまりは一平の胸に顔を埋めた。

署員が一平の傍に来た。

「奥さんの話の内容から三人組の物取りとも、だが一平さんが関わっている事案も無きにしても非ずです、そちらの方からも当たってみようと想っています、が今言える事は昼とは違い夜は人道りもなく淋しい場所です、夜間の警らを増やします」

「ありがとうございます、この界限の人達の為にもそーしてやって下さい」

犯人検挙に全力をあげますと言い調布署員は出て行った。

「今署員に言っていたがそれ以外に何か気付いた事はなかった」

「催涙ガスをかからせ直ぐ虫の息、それ以外と言われても」

「名を呼んでいたとか」

「そう言われても、あつそう言えば三人の内の一人を他の二人は大将と呼んでいた、逆に大将はおいとかおめいらとか呼んでいた、それに大将は香水の匂いをさせていた、それもレディーガガブランド」

「男にしちゃー珍しいな、香水とは、ましてやレディーガガブランドとはかつて寺島加奈がつけていた」

「三人組は寺島加奈と繋がっているんだらうか」

「可能性はあるでもあるようないようでもある」

と一平は踏ん切りの付かない返事をした。

「一平、まりさんも必死に記憶を呼び戻しているんだ」

どっちなにしたらとマキが口をとんがらかす。

では俺はこの辺で失礼するとガキさんは立ち上がった。

「一平さん皆が居るんだ、事を起こす時は一人でやらん様に」と言い出て行く。

「そーする、今日はありがとう」

ガキさんを見送った。

「まり、救急車は外で待機して頂いている、状態から見て大事ないと想うが念の為病院へ行こう」

一平のその言葉にまりは素直に頷いた。

医師は聴診器をあてがったり脈拍等を診て異常なしの判断、念のために明日一通りの検査を行います、今日は病院に泊まって下さいと告げる。看護師さんをお願いしマキと病院を後にした。

翌朝まりの病室に入った、ベッドに胡坐をかいて食事中。

「病院の食事ってこんなもの、私にはおやつしか想えんよ」

「まーそー言わんと今は病人だ、検査前だ病院食に徹しなければ」

「だけどこれ持って来たところコンビニおにぎりをテーブルに置いた。」

「さすが一平だ、ありがとう」

「だけんどこれらは検査終了後まり、分かったな」

検査は九時から始まった、レントゲンやら採血、心電図等々、二時間を要した。

「結果は午後一時に出ます、そして退院となります」

と看護師さんが伝えに来た。

昼少し前マキがケーキとコンビニ袋を携え入って来る。

「まりさん元気してる、お見舞いと言うか差し入れに来たよ」

「病院食では私は足んない、マキちゃんありがとう、でも幼稚園はどうしたの平常保育では」

「教頭先生が行っておやりなさい、子供たちは私が確り見ときますからって言ってくれました、お言葉に甘えてさせて頂きました、このおにぎりを渡してくれだつて」

一平はため息をつくと言うか大きく息をはき苦笑い。

昼食が済み三人で一息入れていると担当医が入って来た。

「谷端さん異常はありませんでした退院できます、強いて言うなれば皮下脂肪がやや多い、食事に気負つけて下さ  
い」

「今回の検査と関係ないでしょう、そんな所まで調べたんですか」

「関係あるなし関わらず検査の過程で出てくる数字です、多くの結果は正常ゆえその数字だけが眼にとまってしまう」

た、それを言ったままでです、食べてもいいがその分を消費するように努めて下さい」

「三度三度確りと食べるそれが私の食法です」

医師とまりの会話に一平とマキは必死に笑えを堪えていた。

さあー退院しよう、帳場で諸手続きをし三人は深大寺に向かうべくマキのミニに乗った、いっぶくは臨時休業してある、脇の階段から二階に上がった。

見舞い品を広げインスタントだがコーヒーを入れ退院祝いを始める。

「なーまり、昨夜の三人組は誰だろうか想像つくかな」

「どうせキザ監察官の回し者か白家補佐官の息の掛かったものだろう」

「そー想うか」

「想いたくなくつつたつて想っちゃう、何やってんだ年増は放つとけ早くPC探すんだ、探したら長居は無用直ぐ立ち去るんだと言っていた、あいつ等の目当てはPCだったんだ、それも一平の」

「小生の間違えてまりのを見つけ持ち去ったんだな」

「あいつ等中身確認せずだ、私のはレシピしか書き込んだくない、今頃は大目玉食らっているのでは」

「小生は打ち込みはいっぶくで多々するが必ず上へ持って行き保管している」

あいつ等、再度いっぶくにPCを取りに来るだろうかとマキが言う。

「それはない、パトロールも強化されまりも小生もそれなりに備えはしている、奴等にしてみればリスクも多い、指示は出さんだろう、と言った所で三人組は反国王派と繋がっている、香水からして寺島加奈と何らかの関係がある、又小生等がどの程度悪巧みを調べ上げているか確認しにいっぶくを襲い、記されていると想われるPCを奪っていったのではないか」

「これからどうタガを狭めて行くつもりなのか」

とまりとマキはハモリ一平に問いした。

「今までの調査で反国王派が国王暗殺、クーデターを目論んでいるのは確かだ、何時何所で誰がどの様な方法で行するかにある」

まりは一平に言った、大まかに掴んでいるのではと。

「国王来日中だ、場所は八丈島が濃厚」

「それだけ分かっていれば本庁に連絡し警視庁ぐるみで警護についたらどうなの」

「それは考えなくてもない、本庁は暗殺を察知しておらんのか動きがない、察知したとて多分相谷監察官が職権を盾に処理してしまったとも想える、さもなければ上層部が動いている筈だ、マスコミだって匂わず記事を載せていても不思議でない。このような為に新設された特殊隊、目下、楢沢隊長のもとには何ら指令が出ていない、小生の聞いたところによると八丈署に独自で警戒に当たるとだけ」

「ならば一平はどう立ち向かおうとしている」

「老いぼれ始めた小生のHDを駆使すれど良策が浮かばん」

一平はむんずと口を結んだ、まりは昨夜より差し入れはあったが僅かな病院食だけ、医師に言われた事も忘れ果物やケーキにお菓子等見舞い品をマキと食し始めた。

ピース国王、タッカー大町来日を明日に控えた日、一平はいつぶくで瞑想に耽っていた、まりが自然体に動く、一平のテーブルにコーヒーを音をたてずに置いた、立ち去ろうとしたまりにありがとう。

「あら起こしてしまったゴメン」

「寝てはいなかった、コーヒーを欲しいと想っていたところだ」

「お昼には少し早い、時間が来たら作るからレアチーズでコーヒー飲んで」  
あちっちなながらコーヒーカップに口をつけた。

ルパン三世がカーゴパンツのサイドポケットから声を掛ける、のりからだ今搭乗中なのではとガラケイをとった。

「一平です、のりどうしたフライト中では」

「オフ日初日だが八丈便に欠員が出ってしまった、急きよ乗務してくれと言れ朝便に乗務し今八丈空港に着いた所、慣れぬ便にてこずってしまったがクルー皆に助けられ無事任務を果しました、今は午後便が出るまでの僅かな間皆でコーヒータイムしているところです」

「八丈島かまだ暖かいだろう」

「空港の外を見渡せば皆半袖です、あついや、そんな事はどうでも良い大変なカップルを見てしまったのよ、一平さんもご存知のように自分は人を見る眼があります、見違いではありません」

「誰を見たと言うんだ」

「男はキザ監察官の元情報屋田川健二郎で女は寺島加奈でした、彼女は赤黒く日焼けし眼の白黒がぎよろつき異様さ多分、正に黒豹です、機内では年の差カップルそのもの、誰も羨む二人でした。」

「そこまでのりが言うんだから田川と寺島加奈に間違いないな」

「一平さん何を仰る自分は見間違いないと」

「おーごめん、空港に着いてから二人はどーした」

「グランドスタッフに聞いた所によると、大きなトランクを二つとゴルフバックのような物一つを引き取り空港の外に出て行ったと言っていました」

「のりありがとう、ハバーナイス リターンフライト」

下手な横文字使うんでないよとまりが厨房から、一平は頭を掻きまりにペコリ。

「三十分ばかり二階に行つて来るランチはその時間に合わせてくれ」

「まあーまあーわがままな事、でも分かりました三十分経ったら降りて来て」

じゃーなーとばかりに一平は右手を軽く挙げ二階に消えた。

筆をとり和紙に程よい大ききで願と書いた、PCからメモリーカードを外し先程の和紙で願の字が表に来るように包んだ、神棚に揚げ2札2拍手1札し正座、再び瞑想に耽った。

一時ちよい過ぎ、遅くなつてごめんとまりの声で我に返った。

「怪我はなかったもう大丈夫ですか等お見舞いがてらのお客様が多かったので一平のランチ、遅くなつちやったゴメン」  
「いや、どーつて事ない小生よりまりを心配してくれるお客様が大事だ」

「やつぱし一平だ、そう言うところが私は・・・」

「おい、・・・は何だ」

恥じらいとも言える表情浮かべデザート付きのランチを丸テーブルに置いた。

「お見舞い品だけドリンドとブドウもどうぞ」

「まりは食わんのか」

「さつきマキちゃんと食べ過ぎつちやった、ちよいと小休止」

「願い事を書き和紙に包んで神棚の右端に置いた、中身を見てしまうと叶わんと聞く、何時もの朝と同じように柏手打つといってくれ」

「どんな願い事かしら楽しみだわ」

そーこーしていると海老原幸子から電話が入った、右にホーク左手はトーストを持つ一平、まりに目配せした。

「幸子さんまりです、今一平はトースト頬張っています、私がとりました」

「まりさんこんにちは、新聞で見ました襲われたんだって大丈夫なの」

「大事には至らなかつた、ピンピンしています声からして分かるでしょう」

「あー良かった、国王来日でしつちやかめつちやか見舞いにも行けなくて」

「私より幸子さん徹夜続きでしょ、体壊さないようにね」

「私、体壊さないから、一平さんには一平流があるように私には私流があります上手くやっています」

「とは言うけれども体調管理は確りね、つあつ、一平の右手が空いた変わるね」

「待たせつちやっつてごめん」

「こつちこそ食事中に電話なんてしてごめんさい、国王来日最終日程が決まりましたので一平さんの耳にも入れてこうと想いまして電話しました」

「ありがとう、是非とも願います」

・ 十月十日 国王タツカー大町と王女ユンザリア、SPを含め三十人で午後便で来日、直ちにプロモーションビデオ

撮り、天皇陛下との晩さん会

・ 十一日 終日、旅行会社挨拶回りとビデオ撮り

・ 十二日 京都観光

・ 十三日 早朝便で八丈島に、休憩後一本、午後一、二本

宿泊所 大吉丸、近隣民宿

・ 十四日 終日、島内観光、宿泊所 大吉丸、近隣民宿

・ 十五日 午前中、島内観光、午後帰国の途に

「ざつと話すと以上です」

「さつちゃん、十五日の島内観光の詳細は分らんか」

「分刻みとはいきませんが分かります、朝は九時に大吉丸を出発、底土港により登龍峠、八丈灯台か太平洋、黒潮の流れを見ます、後に地熱発電所で仕組み等を見学、前後するかもしれないがアシタバアイスとパッションジュースを、裏見ヶ滝を見る、お昼いそぎえんに行きご赦免料理を味わう、午後は玉石垣のふるさと村へ。宇喜多秀家の墓を

回り南原千疊敷に、車で八丈富士の中腹の牧場にここでは眺望とジャージイ牛のアイス、で宿舎着」

「十五日午前中の島内観光は」

「三原山での散策を予定しています」

「ありがとうございます、ところでさっちゃんは八丈へは」

「はい、国王に同行します、ランソン駐日大使とシャルム一等書記官他に準備委員会の三人の職員も同行します、本国からの国王補佐官と秘書官の二人です」

「白家補佐官は行かないのか」

「大使より留守組のトップとして残ってくれと言われた」

「素直に受けたかい」

「口をへの字にし連れて行ってってくれと言わんばかりだった、シャルム一等書記官が全て私に任せとけとばかり彼を制した」

「ほっほーそうだったかそりゃー無理もないと思う、では気負つけてな」

「ありがとう行って来るわ、でも八丈の頃には行ってしまおうと思うけど台風が気掛かりです」

「さっちゃんの行くところ台風無し、晴れ続きで行こう」

十一日早朝月明りは油壺湾の二人の男を照らしていた、一人は赤銅色したヨットサービスの会長大下氏、もう一人は谷端一平だ。

「一平、四十年振りかな否もつとになるな」

と声かけた大下氏は額が後退し白い物が大分混ざっている。

「ヨット乗りしてた頃は二十代三十代、今年七十になりました」

「そうかそんな前になるか、あの頃が懐かしく想えて来る、ヨット壊しちゃー親父頼むとよく言っていたな」

「その節はありがとうございました、そんな親父さんあつてこそ今の小生があると云つても過言ではありません、ところで親父さんはお幾つになられましたか」

「浅黒い顔し二本足で立って居るがここかしこにガタが来ている、店は倅達に任せ今は隠居の身八十五になつてしまつた」

「けど親父さんが工場にいるだけで皆の士気が上がるんでは」

「どうか分らんがちよこちよ聞きよる、それはとして頼まれたクルーザーそこに係留しといた」

「さすがは親父さん、やる事が早い有難うございます」

「八丈に行くと言うが何しに行くんや、飛行機で行つた方が楽なのは」

「野鳥観察です、前もつて予定してたが今夜から明日午前中に台風崩れの低気圧が北上してくるよーだ、有視界飛行の八丈便は欠航が予想される、よつて今朝からヨットで八丈島に向かう事と相成つた次第」

「一平の操船技術を持ってすれば荒れたとしても難ないだろう、だが気負貫くなよ荒れた海はいとも簡単に人命を奪つてしまふ」

「了解、海の恐ろしさは人一倍知っている、伊豆諸島の港に緊急避難も想定内」

「ならばいい、想定外かも知れんが風も、その時の為に船内機用燃料を20リットル積んどいた、それと一平の言うライスボールも」

「有難うございます、親父さんをお願いがある怒らんで聞いて下さい」

「なんじゃー一平の頼みじゃー断れんが」

「だからヨットの手配をお願いしました、野鳥観察が終われば乗って帰つて来る予定です、が想定外もあります、早い話が帰路は飛行機使うかも」

「てー事は俺にヨットを八丈島まで取りに来いと言うのか」

「さすが親父さん物分かりが早い」

会長はナヌツーつとした表情するが首を立てに数回。

「先も言ったように低気圧は気いつけてな、わしが敢えて言うまでもないと思う、黒潮を避ける意味でも石廊崎を目掛け、そこから式根島と神津島間を抜ける、後は八丈島目指してまっつぐだ」

何もかもありがとうございます、じゃー行って来ると一平が言いかけた時会長が制し言い始めた。

「一平、下手だなー」

「下手って何が操船ですか、まだ棧橋から離れていませんが」

「一平のヨット技術は逸品で、俺の言う下手とは操船ではない、ウソをつくのが下手と言っているんだ」

「何もウソはついていません」

「バカたれ！、わしは老いぼれても一平のウソは見抜ける。老いてここかしこがガタつて薬物も多用、歩くのも思うようには行かん、寝たつきりの人や闘病生活を余儀なくされている人も多しそのご家族も、その様な人達にお叱りを受けるかもしれないがわしやー親から授かったこの体が好きなんだ、病を悔やんではない、病気とうまく付き合っていくしかない、病とはそんな風に想う授かった大事な体を大事にせんと、鳥観察ではなく、ただならぬ用で八丈へ行こうとして、顔に書いてあるぞ」

ふいの親父さんの言に一瞬鼻白んだ。

「はいその通りです、親父さんにあつちやーかなわんなー、小生流八丈島シナリオと言うかそれを辿ってみようと想っている。それ以上は今は聞かん事にして下さい」

「いいだろう、生身は二つとない大事にせい」

一平は船内機のスイッチを回した、ジーゼルエンジンの重低音が響く、ピースサインと共に艇は棧橋から離れる口笛

が自然に、ルパン三世のテーマだ。

六時、まりは起床したベットに一平はいない、何時もの様に朝散だなど独り言を言いながら身支度。

帰宅時間を過ぎ八時を回った、時たまある事だ珍鳥と言うか予期せぬ鳥さんが出現したのだろう、今朝も相対しているのだろう、九時を回った一平の朝飯はそのままにし階下に降りいっぶくの準備を始めた。

いっぶくは開店したが一平の朝飯はそのままになっている、朝散から帰ってこなかった、まりは何気なしにマキに電話した。

「あらまりさんどうしたの」

「一平が朝散から帰らんよマキちゃんに何か連絡なかった」

「無かったよ、でも可笑しいね几帳面な一平が遅くなると連絡しないなんて」

「マキちゃんもそう思うでしょ」

でも何かが変だね、あっそうだ念の為に確認してみして下さい撮影機材を、例え朝散でも持って行く筈です早馬はとマキはまりに言った。

「今、確認してくるからねちょっとまってて」

まりは撮影機材の保管場所にもなっているスタジオ1043の編集室へ行った、双眼鏡以外はみなある駐車場に回った早馬は、その旨をマキに伝えた。

「朝散ではなく双眼鏡を持ち早馬はどこかに出かけたのよ、まりさん心当たりは」

「昨夜の一平は普段と変わりなかったし私には」と

石廊崎を過ぎた辺りから風が強まって来たメインセールを一段リーフ、雨も落ちてくる一平はいよいよ台風崩れの

低気圧がお出ましなされたなどブツブツ、陸地はほんやりしていたが見えなくなってしまうコンパスを頼るしかない、黒潮を斜めに横断だ横流れを考慮しタックを繰り返した。

ヒールが増してきた二段リーフ、ジブもジェノアからNo3にチェンジ、艇は木の葉のように荒波に揉まれる。波により容赦なしに艇底からズンズンとコクピットに座る尻を突き上げる、ライフハーネスを装着しふいの艇横倒れ等による転落防止に備えた。

鈍い音と共にジブを止めてあったクリートが吹っ飛ぶ、反動で艇はポート側に傾いた、ライフハーネスささまさまだった、無理もない小生が塩っ気たつぷりの頃のヨットだ、スターボクリート諦める、シートをウインチにひと巻きしポート側のクリートに止めた、スターボードタック時はこれで行く八丈島まで持ってくれよなとポートクリートをそつと撫でる。

両弦よりショックコードでラダーを固定した、ナイトセーリングに備えシート、セール、灯火等を確認、何てこっちゃコンパス灯が点かん、マメに懐中電灯で確認すれば済む事だと小生に言い聞かせる。

真つ暗闇だ、見えるのは白い牙をむき出しにした大波の数々、艇は横倒しも多々ジブは諦めたメインセールは最終までリーフ、時間と速度計からしてヨットは神津島と新島を通過中と想うのだが灯台など見えん、コースは間違いなくとれていると信じた、でもこの荒れ狂っている海は何だ、小生に八丈には行くな戻れとも言っている様だ。

風は前から横方向に変わって来た、間もなく低気圧を抜ける否行き過ぎるだろう、が尚も襲い掛かる大波にラダーを小刻みに操作し艇安定航行に努める。

いっづく閉店後マキと村上捜査課長とまりは丸テーブルを囲んでいた、課長が沈黙を破った。

「まりさんには酷に聞こえるかも知れん驚かんで聞いてくれ」

「私は元刑事の妻です、何なりと仰つて下さい」

「一平さんはピース国王暗殺阻止に向けて動き出した、暗殺は何時かと言うと来日中だ、人混みは暗殺者等にもり

スクがある、そこでどこかだ」

八丈島なら彼等の条件に合っているのではとまりがいった。

「まりさんそうです、八丈なら彼等にとって格好の地と言える、一平さんはそう睨んだ、単身八丈に乗り込み警察手帖も拳銃もない素手で暗殺者等と対峙しよう」と

丸腰で拳銃と相対そうなんて危険きまわりないとマキが。

「真実を極めた一平ならやり兼ねない事です」

マキが村上捜査課長に向き直り檄する。

「父っ様何とかならないの！」

「警視庁上層部にピース王国の件は誰一人の元にも届いていない、相谷監察官の所で停まっていると想う」

だったら父っ様一人でも八丈島に飛び一平と行動を共にしたらとマキは噛みついた。

「マキちゃんありがとう、一平は協力すると言っても断られるのが関の山、現に府中署の稲垣巡查長さんも高輪署の大泉警部補さんも悉く断っている、若しだよ、お門違いだとしたら謹慎なんてもんじゃない即更迭です、一平は現職の刑事さんに協力を要請しない筈です」

まりのその言葉に二人は黙り込んでしまった。

「然も今日の八丈島便は台風崩れの低気圧の為欠航になっている、一平は果たして八丈島に行ったもんなのか定かでない、早馬口で出かけたその目撃情報もある筈です、今はとにかく一平が何所にいるのか突き止めるのが先だと想います」

「まりさん分かった、あのサイドカーは眼につき易いすぐ見つかるだろう、近隣の県警に搜索願は出してある吉報を待って下さい」

村上捜査課長はまりとマキを前に腕組みした。

低気圧は行き去った、一平の操るヨットはフルセールで八丈島目指している。今迄の時化は何だったんだろう、そんな事を想いながら後方を見た、何もなかったかのように穏やかそのものだ、親父さんが差し入れてくれたおにぎりをパクついだ。

午前三時、一平は前方を眼を凝らしながらヨットを操る、島の東端の石積ヶ鼻に建つ灯台の閃光の現れるのを待ち望んでいる。

気分転換カルパン三世のテーマの口笛、コーヒー缶を開けた一口二口、何度も海水の洗礼を受け喉がと言うか口ん中がしょっぱい。

「まりのには大分劣るが美味い」

見えたー、二時三十分の方向に適度な間隔でぼんやりと明るくなる、間違いない末吉灯台の灯だ。

予想進路よりずれてはいるが問題でない、追い風気味だったけどシートを引き込み、ぎりちよんのスターボで灯台目掛けた、閃光がはつきりしてくるがコースから外れ始めたポートに切り替えた。

夜が明けはじめと背後の東の空が明るみを帯びてきた。陽が灯台を照らし始める目指すは底土湾の右、神湊漁港だ。タックを繰り返し近づいた八丈富士と三原山が迫り来る、夜は明けた出港の準備だろう人が一人二人見えてきた、セールを降りし船内機を回し漁港内に栈橋で高柳先生が手を振っているのが見えた、無事着岸し高柳さんにもやいロープを投げる。

「よーあの嵐の中を操船しましたね、さすが一平さん腕は衰えていませんね」

「シートの掛け方が悪かったかスターボード側のクリートを飛ばしてしまった」

「だけどこれだけの老ヨット、どこが壊れてもおかしくない、後は引き受けた、頼まれたバイクはそこに置いてあります、タネコマドリを撮影に三原山山麓に行くといつぞや言っておった、早速行かれては」

「ありがとう、そうさせてもらう、バイクの方が山麓では動きやすい、では行って来る明日には返却できると思う」と言い残し半キャップを被りリュックを背に原チャリは高柳先生の視界から消えた。

高柳さんは消えた方を見、腕組みをし首を傾げた、鳥撮りにしてはおかしい、三脚は持たんしその他機材だつてあのリュックでは収まらん何か変だ。そう思いながらも漁業組合に行きヨットの係留を頼み自宅に戻った。

高柳さんは校長室で一人食事しながら盛んに首をひねる、どうも何時もの一平さんと違う、親父さんに連絡してみるかとお茶飲みながらプッシュした。

校長先生は学生の頃ヨットに明け暮れていた、そんな時ヨットでは師範クラスの谷端一平と出会った、長い付き合いだと親父さんが出る間独り言。

「おー高柳かい、懐かしいな一平は着いたかい」

「はい、今朝方港で落ち合いました、クリートを一つ飛ばしてしまったと言っていた」

「嵐の中あのおんぼろヨットにしては被害が少ない、それも一平のヨット操船技術は衰えておらん」

「足取りも確りしてるし体調も頗る快調と言っていた、ところでタネコマドリを探しに行つて来る、と手配した原チャリで直ぐ三原山山麓の方に行つてしまった、でも親父さん何か変なんだ」

「高柳もそう思うかわしも何か変と」

「撮影機材は持っていないし、黒目が異様に見えた」

「わしは一平に正した、タネコマドリを探しに行くと言つてたが今回の八丈行は他に目的があるので」

「目的を話しましたか」

「躊躇するも話し出した、小生流にシナリオを書いた、それを実行しに行くんです」

「シナリオとはどの様な」

「それ以上はいくら親父さんでも話せん、明後日の午後まで待つてくれと言ひ例によってルパン三世のテーマの口笛と

共に壺から出て行った」

「明後日とは明日ですね、明日の午後何が分かると言うのかな」

「わしは想像つかん、高柳なら分かるんじゃないのか」

「いやー分らんです」

「そうかそうだよな、明日の午後を待つしかない。あの何とかと言うサイドカー、事が済んだら引き取りに来ますからそれまで預かっていて下さいと言いきりやがった、艇庫にしまつといた」

「そう言うところ今も昔も変わらませんね」

「高柳は一平の連絡先知ってるか」

「はい、知っています昨年娘さんを連れて表敬訪問と称し一泊で来ました、ついこないだは酒に滅法強い娘さんと一緒に35度飲みに来ました、住所電話番号は知っています」

「そんなら家族に連絡してやってくんないかな、あの様子じゃー家族に無断で出て来たに相違ない、心配してると想うしシナリオ実行の詳細も分かる電話してやってくれ」

一平の安否を気遣って縁の人達でいっづくはいつばいだ、まりは臨時休業にした、外はどこで嗅ぎ付けたか平成日報を始め報道各社が集まり始めている。調布署の捜査課の面々、三鷹署は村上捜査課長が報道各社の対応に追われる、カウンターを挟んでまりと三鷹署新井署長が難しい顔して話しこんでいる。

「まりさん明日はピース国王一行は八丈島に行きダイビングを楽しむ、八丈署から午前中に入った、何でもユウゼンの群れに出つくわすのが国王も女王も楽しみにはしていると言う」

「良かったですね、それを見たくて八丈島を予定に入れたんだから」

「かつて一平さんが仄めかしていた、八丈で暗殺があるような事を、このまま何も起こらぬ事を願っている」

「皆に心配や不安がらして、一平どこにいるんだ聞こえたら返事してカウンター上のサイホンの間に置いてあるまりのスマホが鳴った、あら校長先生からだど電話に出た。

「はい、谷端まりです先生ご無沙汰しております」